

## 2005 年度春学期「日本語教育実践研究(6)」の「文法」授業の報告 I

小林 友美

【キーワード】 機能文型 コミュニケーション 発問 「5分間ユニット」

### はじめに

筆者は、2005 年度春学期に佐久間まゆみ先生の指導の下に行われた「日本語教育実践研究(6)」の授業を受講した。受講生は、この授業の一環として、早稲田大学日本語教育センターの別科の日本語専修過程の開講科目である「日本語文法6A」の授業にも参加した。「日本語文法6A」は、佐久間先生が担当される中-上級レベルの文法の授業で、受講生は、この授業で参与観察を行い、そこで学んだことをもとに、「日本語教育実践研究(6)」で、11 週目に行われる実習授業に向けての準備をしていた。実習授業は、「日本語文法6A」の授業の中で行われ、今学期の受講生4名が、1コマを担当した。

### 1. 「日本語文法6A」の授業

2005 年度春学期の「日本語文法6A」のクラスは、男性3名、女性 13 名の、合計 16 名の学習者で構成されていた。出身国は、中国、韓国、タイ、アメリカ、スウェーデン、ロシアと様々であった。学習段階は、中級後半から上級前半にかけてのレベルで、授業時間は、1コマ 90 分である。教科書は、早稲田大学日本語研究教育センターの佐久間まゆみ・川本喬編『日本語文法6 I』(2004)を使用している。

#### 1.1 授業の目的

『日本語文法6 I』の「はしがき」には、「日本語文法6A」の授業の目的について、「中級段階の日本語の文法を学んだ日本語学習者たちが、いよいよ生の日本語の文章や談話の理解と表現に挑戦するための予習段階として、日本語の基本的な「文章型」や「談話型」を身に付けること」とある。文型を学習者に理解させるだけではなく、運用面に重点を置き、コミュニケーション能力の育成を目的としている。教科書は、全部で 42 の「機能文型」(注1)から構成されており、「場面」、「程度／範囲」、「並列」等の全 16 機能が学習項目であるが、今学期は、6レベル前半の6機能を扱った。機能文型は、「a.実質(内容)機能」、「b.構文(文法)機能」、「c.構話(文章・談話)機能」の3種類に分類されている。そして、各機能ごとに複数の文型が提示され、各課が、5~6文から成る「例文」、文型の接続や意味が説明されている「解説」、小説や新聞の社説の一部が提示されている「実例」、「問1」

「問2」からなる「練習」から構成されている。

## 1. 2 「日本語文法6A」の授業の展開

今期の「日本語文法6A」の授業は、全14週間にわたって展開された。1回の授業が「1. 予習」「2. 授業」「3. 復習」という3段階で展開される。「1. 予習」では、次週に学習する機能文型の「例文」「実例」を理解し、「練習」をしていくことになっている。「2. 授業」は、「①例文」「②実例」「③練習」という3段階の流れで学習活動が展開される。「3. 復習」は、学習内容の確認と応用を図るもので、学習した機能文型を用いて、毎回、機能文型1つにつき例文を3つずつ作るという宿題を提出する。例文は、機能文型の用法を正確に理解して作成し、自分の経験など本当のことを面白く短い例文にまとめるというものであった。これは、学習者の運用力の向上に大きな効果がある。宿題は、細かく添削されて、評価とともに次の週に返却される。これは、学習者のフィードバックと自律的学習に効果的である。さらに、教師は、宿題の添削により、学習者各人の理解を詳しく把握することができる。

次に、「2. 授業」の展開について詳しく取り上げる。1回の授業で、3～4項目の「機能文型」を学習する。1文型につき、「①例文」「②実例」「③練習」という3段階で展開される。「①例文」の前に、文型の導入を行い、新出項目の機能文型が提示される。既習の学習項目との比較がなされることもあり、学習者にとっては、問題意識を持って学習できることとなる。「①例文」は、5～6の例文からなるが、1例文につき、学習者が一人で音読し、教師の範読の後で、学習者全員がリピートする。それから、教師は、その例文に関する発問をする。この問答は、例文の内容確認と文型の運用理解に意味があるものである。佐久間先生の授業の大きな特徴の一つに、この「発問」が挙げられる。先生の授業では、教師が一方的に文法を解説するという形式ではなく、多くの「発問」を通して、学習者とのやりとりが行われる。

その後、データベースからの「②実例」を学習する。「②実例」は、新聞や小説からの適切な文例が提示されている。「①例文」よりも長い実際の文章で、機能文型がどのように使用されているかを知ることができる。最後に、「③練習」では、指名された学習者が予習してきたものを解答する。これは、教師と学習者のみのやりとりに止まらず、学習者と学習者のやりとりも見られ、コミュニケーション能力の養成を目指した活発な学習活動が展開される。

## 2. 「日本語文法6A」への参加

「日本語教育実践研究(6)」の受講生は、第2週目から「日本語文法6A」の授業に参加した。初めのうちは、教室の後方に座って参与観察をしたが、後半になると、学習者を知るために、受講生1人につき学習者4人のグループ編成をして、学習者の中に入る形を取った。これによって、学習者の予習の様子や授業への取り組みを観察することができた。筆

者は、日本語教育の経験が全くないため、日本語の授業を学習者側から受講するのも、初めてのことであったが、学ぶことが多く、とても意義のある経験だと思った。第3週目に宿題の添削方法の説明があり、教師による詳しい添削によって誤用を訂正することは、フィードバックに大きな効果をもたらすことになると感じた。

また、受講生は、宿題の返却を担当したが、これは、学習者の名前を覚えるきっかけにもなり、どのような誤りをしているかを知るチャンスとなった。授業後に、受講生が自分のグループの学習者に、返却された宿題について質問される光景がたびたび見受けられ、筆者も学習者の質問に必死に対応した。学習者の作成した例文や質問に対して、上手に説明できないこともあり、なんとか説明して納得してもらおうということが多かったが、このようなやりとりを通して、学習者の作成した例文誤用を知る機会となり、何よりも、学習者とのコミュニケーションが取れたことに大きな意義があった。

### 3. 「日本語教育実践研究(6)」の授業

#### 3.1 「日本語教育実践研究(6)」の授業の展開

「日本語教育実践研究(6)」の授業は、全14回行われ、主に、第11週目に行われる実習授業の準備に時間が費やされた。この授業の課題として、「授業見学ノートの作成」と「実習授業の教案作成」があった。「授業見学ノートの作成」とは、「日本語文法6A」の授業の参与観察をもとに、所定のシートに「時間」「展開」「学習活動」「所見」をまとめるもので、3回提出した。「実習授業の教案作成」は、「概要教案」とセットで2種作成した。毎回、佐久間先生が添削していただき、評価されて返却される。このコメントが次の「教案作成」に生きてくるため、受講生にとってとても重要な意味を持つものとなった。

授業は、指導計画の立案を中心に、教材分析や模擬授業を通して行われ、ディスカッション形式で行われた。このディスカッションでは、他の受講生の経験や意見を聞くことができ、とても貴重なものを得ることができた。以下、実習授業の準備段階の全体的な流れを具体的にまとめる。

- (1) 第1週目に、今学期の「日本語教育実践研究(6)」の授業計画が配布され、「日本語文法6A」の概要や「日本語教育実践研究(6)」の課題についての説明があった。
- (2) 第2週目は、「授業見学ノートの作成」の課題が出された。「日本語教育実践研究(6)」の授業中にも、「日本語文法6A」の授業見学の報告を行った。また、実習授業で行われる文型の分担を決定した。
- (3) 第3週目には、2回目の「授業見学ノートの作成」の課題が出された。第3週と第4週では、実習授業で担当する「機能文型」についての教材研究をした。筆者は、「6. 2 話題(前提・立場)」の機能文型「38. ～から(いうと/いえば)、～」を担当したが、『日本語文型辞典』(グループ・ジャマシイ編著 1998)、『どんな時どう使う表現文型500 中・上級』(友松悦子他 2名 1996)を参考に文型を分析し、この時点で、「～からいうと」と

「～からいえば」の機能文型の使い分けを十分に説明することができなかった。しかし、教材研究を重ねることで解決することができた。

(4) 第5週目からは、課題として「教案作成」を行い、それを佐久間先生が添削していただき、他の受講者とともにディスカッションを行った。そして、それをもとに、「教案の練り直し」が行われた。この段階を数回行い、最終教案と概要を作成した。第8週目には、教案に沿って、時間を測りながら、声に出して練習した。ここでは、教案で計画したことが時間内に終わらず、時間を意識することの重要性を実感した。

(5) 第9週目と第10週目は、実習授業を行う教室で、実際に模擬授業を行った。それまでは、研究室の中でしか模擬練習をしたことがなかったので、実際の教壇に立って、リハーサルをしたことで、予想以上に声のボリュームを大きくしなくてはならないことを痛感した。自分では、大きな声を出しているつもりが、後ろの方にはあまり聞こえていない。どんなにいい授業を展開しても、声が小さくは意味がないのである。学習者に聞き取りやすい発声の大きさや話し方は、教師の基本的な技能である。

(6) 実習授業の終了後は、撮影したVTRを見ながら、授業分析と反省をした。そこでは、お互いの授業を批評し合った。自分では分からなかったことが、映像を通して、また、先生や他の受講生の意見から明らかになり、新たな発見と反省点を知るいい機会になった。第12週目には、3回目の「授業見学ノートの作成」をして、第14週目にそれをもとにしたディスカッションを行った。

### 3.2 実習授業の準備

ここでは、教材研究を経て、教案を作成し、実習授業に至るまでの準備の概要について述べる。教案作成は、「5分間ユニット」(注2)を軸として行なった。この方法は、「無駄な学習活動や教師の発話を省き、授業展開の基本型を組み立てることができる。」、また、「短時間しか与えられない模擬授業でも5分間ユニット方式だと容易に指定された箇所から実践に入ることができ、指導担当者の指示や授業の録画ビデオの扱いも容易になる」(佐久間 1995)とされるもので、筆者の教案作成においても、効果的な役割を果たした。筆者の場合は、実習時間の持ち時間が20分間であったため、「例文」に5分、「実例」に5分、「練習」の間1に5分、間2に5分という4ユニットを作成した。

教案作成で重点を置いたのが、「発問の作成」である。前述したように、佐久間先生の授業では、「発問」が多く用いられる。それによって、学習者が機能文型をより深く理解することが可能になり、「発問」を通して教師とのコミュニケーションが成立し、学習者の参加意識の向上や、授業後の達成感へと結びつく。しかし、闇雲に「発問」して、単調なやりとりをするのでは、時間内に終わるはずもなく、学習者の意欲にも影響してくる。佐久間先生は、時間内に的確な「発問」だけを行い、ポイントを抑えて、学習者の解答から次の展開へと繋いでいく。さらに、一人一人の学習者の理解も把握しながら展開していく。これを参考に、

発問の作成に試行錯誤し、多くの時間を費やした。筆者が担当した文型は、「38. ～から{いうと/いえば}、～」である。この文型は、話題の「前置き」の表現で、自分の意見を言う前の「前置き」を述べるものだということを学習者に抑えさせたかった。それを「例文」や「実例」、「練習」によって学習者に理解してもらうために、発問の作成において2つのポイントを設けた。1つ目は、「どういう前置きか」、2つ目は、「どこが意見か」ということである。この2点を考慮して、発問を作成した。例えば、「どこが意見か」ということを抑えた後に、「どうしてそう思ったのか」という発問をし、「どういう前置きか」について理解したかどうかを確認するという形式にした。

授業を展開する上で気をつけた点は、「例文」から「実例」に入る時、「実例」から「練習」に入る時、問1から問2へ移る時に、動機付けや学習活動の指示を工夫することである。筆者の場合、教案を作成した際、「では、問1を完成してください。」というように、「では」を多用していたが、佐久間先生の授業を観察して、「じゃあ」「じゃ」「それでは」「今度は」「あまり時間がないので3つだけにしましょう」「皆と関係があるので、問2をします」「～でしょうか」「～ですか」というように、教室用語を使い分けて、授業にメリハリを付け、十分に動機付けをしながら、展開していることに気づいた。また、指名の際は、発問や指示の後に指名し、ポーズを効果的に用いていた。これは、学習者が自分は答えなくていいというような感じを受け、緊張感の喪失を防ぐための効果がある。

このように、佐久間先生の授業の参与観察を行い、詳しい教案の添削やディスカッションでのご指導、アドバイスをもとに、教案を練り上げ、最終教案を完成させていったのである。

#### 4. 実習授業について

##### 4.1 実習授業の分析と反省

受講生4人で、1コマ 90 分の授業を行った。担当した学習項目は、機能文型「6. 話題」である。最初に、遠藤直子さんが「36. ～なんか/なんて/など、～」を担当し、次に伊藤実希子さんが「37. ～を中心に{に(して)、/として、/とした}～」を、3番目に筆者が「38. ～から{いうと/いえば}、～」を、最後に、安明姫さんが「39. ～として(は/も)、/～としての～」を、それぞれ担当した。

ここでは、筆者自身の実習授業を振り返ってみる。まず、大きな反省点として、「例文 38-1」と「例文 38-2」の範読と学習者による全体の音読のリポートを飛ばしてしまったことが挙げられる。教壇に立って、実際に学習者の前で振舞うことで、極度に緊張したことによるものと考えられる。しかし、「例文 38-3」に入ってそれに気づき、範読と音読を通常通り行った。ここで、学んだことは、「範読」と「音読(リポート)」がいかに重要な役割をなすかということである。例文の内容を意識する、つまり、全員で同じ読みを共有することで、問いの内容を理解することができ、教師の発問にもスムーズに答えることができるのである。実際に、

「例文 38・3」からは、学習者の反応がよくなり、発問に対する解答もスムーズになった。学習活動の基本となる「読む」ことは、内容理解が深まる効果があるのである。

また、「例文」の内容理解の「問答」の際の、学習者とのやりとりのしかたについて反省した。要因としては、解答者の顔を見ずに、教科書につい目をやってしまったことが挙げられる。そのため、解答者は、自分の解答の正しさに不安を感じたに違いない。学習者が懸命に出した解答を真剣に聞くこと、それに対して適切に反応することは、コミュニケーションをする上の基本なのに、それを怠り、真のコミュニケーションが成り立つチャンスを逃してしまったのである。それは、「問答」をしている学習者のみならず、他の学習者も見ているため、その後の授業展開に大きな影響を及ぼすことになる。そして、「問答」の際に、その学習者だけと閉じたやりとりをしているような感じになってしまったことが挙げられる。そのことで、他の学習者に対する緊張感が失われ、学習意欲をなくしてしまうことになる。「問答」をしている学習者だけではなく、他の学習者にも気を配り、「問いをクラス全体で考える」という雰囲気を出すことが重視される。そこで大切なのが、教師の視線であると感じた。

また、板書のしかたについても反省点がある。VTR を見ながら、先生から「}」だと、「=」と勘違いする学習者もいるかもしれないので、「}」を「→」か「+」という記号にした方が分かりやすく、効果的だったのでは、というご指摘をいただいた。自分では、分かりやすいと思っていたが、VTR で観察すると、それほどではなく、先生のご指摘は納得できるものであった。記号は様々なことを語ることになるため、分かりやすく、慎重に用いなくてはならないと思った。このように、多くの反省すべき点は、今後の私の課題となっている。

次に、よかったと思う点を挙げたい。まず、予定していなかった「～からいう」と「～からいえば」の使い分けの質問が学習者から出たので、それを利用して、学習者に解説できたことが挙げられる。戸惑うことなく対応できたのは、教材研究の成果だと感じている。また、時間内に教案の内容を完了することができたこともよかった点として挙げられる。

学習者たちの様子は、初めは、筆者の緊張を感じ取ったかのように、少し緊張した雰囲気だった。これは、例文 38・1 と 38・2 で「範読」と「音読」を飛ばしたことも影響している。しかし、後半になって、筆者の緊張感が抜けるとともに、学習者もリラックスしてきて、途中からは、笑い声や質問も出てきた。さらに、学習者同士の問答のやりとりなども見受けられた。教師の態度が、学習者の反応に大きく影響することを実感した瞬間であった。

#### 4.2 全体の授業の分析

学習者は、ビデオカメラの設置や他の院生たちも来ていたため、少々緊張していたようだが、授業が展開するにつれて、いつもの調子を取り戻していったようである。通常の授業と異なっていたのは、質問や学習者同士のやりとりが多く見られたことである。これは、学習者が授業に協力的に参加してくれたことによるものであり、私たちを支えてくれたのだと思った。実習授業は、いつもとは異なり、入れ替わり立ち替わり4人の院生が授業を展開して

いったが、これは、学習者にとっては大きな負担となったに違いない。しかし、集中力を切らさず、協力的な態度で授業に参加してくれた。4人の受講生が1コマの授業をやり遂げることができた理由の一つに、学習者の協力があつたことを忘れてはなるまい。授業後の学習者は、「勉強した」という達成感が見られ、その様子を見た筆者は、90分という限られた時間の中に、今まで準備してきたものをなんとかやり遂げたという「受講生」としてのやりがいと、少しだけ学習者のために役立てたという「教師」としてのやりがいの両方を感じることができた。

#### 4.3 他の実習生の授業の分析

ここで、「37. ～を中心に{に(して)、／として、／とした}～」を担当した伊藤実希子さんの授業のみを分析することにする(注3)。

伊藤さんは、筆者と同様に教育経験はないが、実習授業では、とても落ち着いて、学習者をリードしていった。予定していた早稲田大学の報告書を副教材として使用した際には、学習者に興味を持たせ、学習者の理解に時間がかかると予想された「例文 37・1」でも、文字カードを利用して解説するなど、効果的に副教材を使用していた。緊張したせいも、話すスピードは少々速かったが、それさえ改善すれば、かなりよい授業が展開できたのではないかと感じた。しかし、時間内に、予定通りの学習項目が終わらないと判断して、似たような問題を飛ばしたりするなど、臨機応変に展開していたことや、焦りを態度に出さずに、最後まで学習者に動機付けをして、きちんと授業を展開していった点は、とても未経験者とは思えないほどのものだと感じた。また、伊藤さんの授業では、学習者から多くの質問が飛び交ったが、そのことに対しても、動揺せずに、的確に対応していた点も、よかったと思う。

#### 4.4 実習授業後の授業分析

第12週と第13週目に、実習授業で撮影したVTRを用いて、反省会が行われた。後方からしか見えない自分の態度や、学習者の反応を知ることができた。何よりも、先生や、他の受講生からのコメントによって、自分では気づかなかつたことを知らされ、新たな反省点を見出すことができた。

最終の第14週目は、第12週に作成した「授業見学ノート」をもとに、話し合いが行われた。受講生全員が、第1回目と、第2回目よりも「所見」欄の記入が増えていた。私の場合は、授業分析観点は、全く異なっていた。第1、2回目には、佐久間先生の授業観察の観点を絞りきれずいたが、第3回目には、実習授業を通して見えてきた、教師と学習者のやりとりを中心にすることができた。学習者の反応やそれを巧みにコントロールする教師のストラテジーが見えるようになってきたのである。この授業を通して、自分自身の成長を知るきっかけとなった。

## おわりに

「日本語教育実践研究(6)」を通して、佐久間まゆみ先生の下で、文法の授業の方法を学ぶことができた。筆者は、それ以前に、教育経験がないために、日本語の授業のあり方や学習者とのやりとりという基本的な部分を習得できたと実感している。ベテランの佐久間先生の授業を参与観察させていただき、そこから授業展開のスキルを学んだことにより、私の日本語教師像が具体化されたのであった。参与観察をもとに、教案を作成し、実際に教壇に立って授業をする。このプロセスでの活動は、すべて私にとって初めてのことであり、得たものも多く、とても貴重な体験となった。試行錯誤の末に、実習授業を終えたが、そこに至るまでの検討、準備の中で学んだことと、その後を経験して学んだことは、私にとっての財産であり、今後の教育活動の基盤になるものだと確信している。それをもとに、コミュニケーションを行う能力を身につけ、高めていけるように、学習者の立場になって、授業内容を考えることは、今後の課題となることであろう。

最後に、きめ細やかな佐久間先生のご指導をはじめとして、協力的な態度で授業に参加してくれた学習者、共に助け合った3名の受講生仲間に対して、感謝の気持ちでいっぱいである。また、実習授業の準備やビデオ撮影等にご協力いただいた T.A.の寅丸真澄さん、また、先輩の鈴木香子さん、朴恵煥さん、國府志津枝さん、伊能裕晃さんにも、心から感謝申し上げたい。

(コバヤシ トモミ・修士課程1年)

## 【注】

- (1) 早稲田大学日本語研究教育センター作成『日本語文法 機能文型分類一覧』(2004.4)参照。
- (2) 佐久間(1995)p. 96 参照。佐久間まゆみ先生が提唱された教案作成方法で、「5分間刻みで学習活動を組み合わせて」、日本語の授業を構成するというものである。「初心者教師の実習生には有効な教案作成技術」である。
- (3) 遠藤直子さんと安明姫さんの授業分析については、伊藤実希子さんの「2005年度春学期『日本語教育実践研究(6)』の授業報告Ⅱ」をご参照していただきたい。

## 【参考文献】

グループジャマシイ編(1998)『教師と日本語学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版  
友松悦子他著(1996)『どんな時どう使う日本語表現文型 500 中・上級』アルク  
佐久間まゆみ(1995)「日本語教育実習授業の指導と課題」『日本女子大学日本語教育講座 設立経緯と実習講座』pp. 89-99 日本女子大学日本語教育講座委員会  
佐久間まゆみ・川本喬編(2004)『日本語文法6』早稲田大学日本語研究教育センター



2005年6月28日(火)提出番号[4305A014-4]

## 日本語実習教案概要 No.(7)

7月1日	3時限(3) 13:45~14:05	日本語文法6A 教室[22-511]	担当者 小林友美	教材「日本語文法6 I」p.75~ 76 機能文型 No.6-38 練習<p.38>
学習項目 文型 38 ～から(いうと/いえば)、～ 6.2 話題(前提・立場)		目標 「ある立場やデータによって判断すると、(このようになる)」ということを説明するときの 話題の前置き表現であることを理解させ、適切な表現が正しく使えるようになる。		
時間	展開	学習活動	文型・語句	教材・教具
13:45 ~13:50 ユニット ①	文型導入	学習する文型、表現の提示。 ①38の機能文型は、どんなものですか。 ②「～から(いうと)」、「～から(いえば)」は、どんな時に使いますか。	～から(いうと)、～ ～から(いえば)、～	カード①②
	例文解説 38-1	1. 私の立場から(いうと)、子どもを甘やかさないでほしいと思う。 音読 S3→T→全員 ①これは、どんな人が言っているのでしょうか。(例えば) ②S4さんは、どうしてそう思ったんですか。	・立場 ・甘やかす	p.75 カード③
	38-2	2. 歴史的背景から(いうと)、この教科書はあまり支持されないだろう。 音読 S6→T→全員 ①この教科書について、この人は、どう思っていますか。 ②それは、どうしてでしょうか。	・歴史的背景 ・支持する	
	38-3	3. 民主主義の原則から(いえば)、今年度の法律には、多くの問題がある。 音読 S9→(T)→全員 ①この人は、「今年度の法律」についてどう思っていますか。 ②それは、どうしてでしょうか。	・民主主義 ・原則 ・今年度の法律	p.75
	38-4	4. 先生の見方から(いえば)、この解釈は間違っているかもしれませんが、私はこれでいいのだと思っています。 音読 S12→(T)→全員 ①「先生」は、「この解釈」についてどう思っていますか。(前置き) ②「この人」は、どう思っているのですか。(意見) ③どうしてこの人は、前置きを言ったのでしょうか。	・解釈	
	38-5	5. 今回の調査結果から(いうと)、日本経済の回復への見通しは、あまり明るいものではないといえよう。 音読 S16→(T)→全員 ①この人は、日本経済の将来についてどう思っていますか。 ②それは、どうしてでしょうか。	・回復への見通し ・明るいものではない ・～いえよう	
13:50 ~14:00	事例(3)	「榎ましと友人は古いほど良い」とのことわざもありますが、古い榎ましは塩気も酸味もちょうどよく、いい味がすると言われます。学術的には証明されていませんが、私の経験	・ことわざ ・塩気 ・酸味	p.75~76

ユニット ②		<p>【から言えば】、古い梅ぼしを食べても、体に益はあっても、害はないと思っています。</p> <p>音読 S3</p> <p>音読 T→全員(文型の文だけにする。)</p> <p>①「梅ぼしと友人は古いほど良い」というのは、どういうことわざですか。</p> <p>②「益はあっても、害はない」というのは、どういうことですか。</p> <p>③古い梅ぼしを食べても、大丈夫でしょうか。</p> <p>④この人は、どうしてそう思ったのでしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学術的</li> <li>・益がある</li> <li>・害がある</li> </ul>	梅ぼし
13:55 ~14:00 ユニット ③	練習問題 問1-1	<p>1. (残された足跡)からいうと、真犯人はあの男にちがいない。</p> <p>①誰が犯人ですか。</p> <p>②どうしてそれが分かったのでしょうか。</p>		p.38
	問1-2	<p>2. (私の経験)からいえば、やるべきことを先送りにするのは、間違いだ。</p> <p>①何が間違いだと言っていますか。</p> <p>②それは、どうしてでしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先送り(に)する</li> <li>・やるべきこと</li> <li>・失敗</li> </ul>	
	問1-3	<p>3. 今回の(調査結果)からいうと、日本経済の回復は、(難しいものであるといえる)。</p> <p>①日本経済は、どうなると言いましたか。</p> <p>②どうしてそう思ったのでしょうか。</p>	・回復	
	問1-4	<p>4. (私の計画)からいえば、この方法はベストとはいえない。</p> <p>①これは、どんな方法なんですか。</p> <p>②どうしてそう思ったのですか。</p>	・ベスト(best)	
	問1-5	<p>5. 教師の立場からいうと、(中学時代はできるだけたくさんの本を読んだ)ほうがいい。</p> <p>①中学生はどうするほうがいいと言いましたか。</p> <p>②それは、どうしてですか。</p>		p.38
14:00 ~14:05 ユニット ④	問2-2	<p>2. 私の学習体験から言うと、外国語は(その国の人と話すことが一番大切なことです)。</p> <p>①S9さんは、外国語の勉強についてどう思っていますか。</p> <p>②皆さんは、日本語の勉強の仕方についてどう思いますか。</p>		
	問2-3	<p>3. 実力の面から言うと、日本のチームは、(優勝するにちがいない)。</p> <p>①日本のチームは、どうなんですか。</p> <p>②これは、どんな人の意見でしょうか。</p>		p.38
	問2-4	<p>4. あなたの成績から言うと、早稲田大学に(合格するにちがいません)。</p> <p>①どんな人が言ったんですか。</p> <p>②どうしてそう言ったんですか。</p>		
14:05	終了	安先生に引継ぐ。		